

親の会 1999年(平成11年)3月 (S)

第 1 5 号

この子等の幸せを考える親の会
檜の木グループ

事務局

☎ 494-0018 尾西市富田漆畑16番地

TEL/FAX 0586-61-6055

編集責任者： 広報・研修部

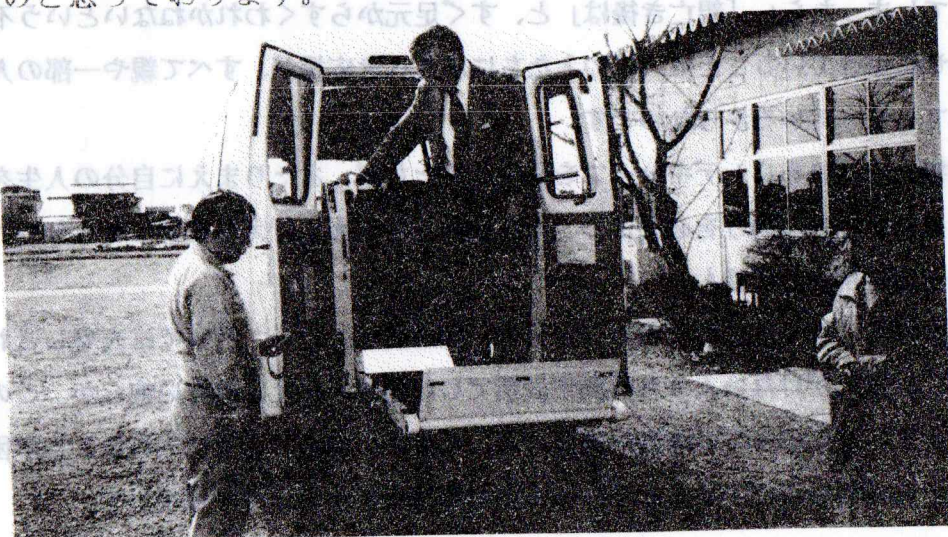
きぼう

待望の檜の木園バス整備！

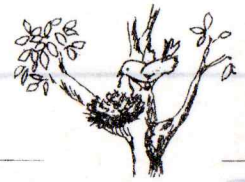
檜の木園バスは、平成元年に施設開所と同時に整備されて以来10年間走り続けてきました。檜の木園を利用する人の通勤バスとして、園(富田)から開明-萩原-平和-祖父江の巡回コースを、家庭と仕事をつなぐ場面としていろいろな話題に花を咲かせて来ました。雨の日も雪の日も走りつづけ、走行距離が20万kmに達した頃には、エンジン音高く、故障も度重なり新替えの要望も高まってまいりました。

今年に入って2月10日に納車式を迎えることが出来ました。トヨタコースターふれあいサルーン(24人乗りマイクロバス)の整備に当たっては、(財)中央競馬馬主社会福祉財団様と(社団法人)中京馬主協会様、そして檜の木保護者会様より多大な助成を頂いて実現できたものであります。このバスは、車イス2台を乗せることが出来るリフト付きでありますので、通所の送迎だけでなく、市内の障害者団体のリクレーション等幅広く活用して頂

るものと思っております。



さっそくりフトの運転を習う



『障害があろうとなかろうと』

～生活施設建設の前に思うこと～

どんなに偉い人でも、教師でも、政治家でも、必ず誰かに支えられて、助けられて生きています。大人であろうと子供であろうと、障害があろうとなかろうと、誰でも生きていくためには様々な人たちの支えや助けが必要なのであって、必ず、どこかでたくさんの人たちに助けられ、励まされ、決して自分の力だけで生きている人はいないはずで

す。人が人として幸せに生きていきたいと願うことは当然の権利であり、共通の願いであるはずで

す。たとえ障害をもっていたとしても特別ではありません。人として、自分の人生を、自分の街で幸せに生きていくために、あたりまえのように、誰かの助けを借りながら生きていくことに何の疑問があるでしょうか。

人には様々な差があり、個性があり、その応援を必要とする部分は、個々人それぞれが様々で、必要に応じた応援がなされることが、そのひとの人生を豊かにしていくことにつながり、ハンデキャップのある人たちになされる応援はその質、量の違いでしかなく、特別なことではないはずで

す。このような当たり前のことが、『障害者』という特別な見方をされてしまうため特別なこととされてしまい、その人やその家族は常に危機感の中に立たされてしまいます。「病気になってしまったら」「親亡き後は」と、すぐ足元からすくわれかねないという不安と隣り合わせに生きていることは、この人たちにあるべき応援が、すべて親や一部のの人たちに限られてしまっているからなのです。

知的障害と呼ばれるハンデキャップをもった人たちが、あたりまえに自分の人生を生きていくために、様々な助けを必要とし、それをあたりまえに行える社会にならなければこのような矛盾は解決しません。

しかしながら、様々な心の動きや、自分の、今必要なことを、言葉では表現しきれず、他者の目には思いがけないような行動や表情でしか意志を伝えられない彼らが、この社会の中で生きていくには多くの障害があり、あたりまえの暮らしを手に入れることが困難で、しかもその権利を口にするこ

このような多くの矛盾を抱えた社会の中にあっては、誰もが安心して暮らすことはできないでしょう。なぜなら、彼らのような多くの問題を抱えた人たちを見て見ぬふりをし、排除しようとする社会のあり方が、次の多くの問題を作り出しているように思えるからです。そして、一番弱い立場の人たちを、一番困っている人たちを大事に受けとめていくことが、誰もが安心して暮らしていける社会を創ることにつながりと思えるからです。

我々は、彼らが安心して幸せに生きていける社会を創るために努力し続けていきたいと願っています。なぜなら、彼らが安心して暮らせる街づくりこそがすべての人たちが安心して暮らせる街づくりにつながり、社会全体の幸せにつながると信じているからです。

障害があろうとなかろうと、すべて人間は幸福を求める権利があり、その人の人生はその人自身がまぎれもない主人公です。新しく創られる生活施設が、その人の最大のドラマであるかけがえのない人生をできるかぎり遅く、楽しく、豊かなものにするために、あたりまえのように助け合い、応援し合い、その実践を通して人が人を理解し、認め合うことの意味を深めていけるような場所となり、その活動が社会全体に大きな影響を与えられるような場所となれるよう努力していきたいと思っています。

『はたらくこと』

田村一二さんの本の中に「健康になる方法」というのがありました。なるほど!と思っただころを、ちょっと紹介させていただきます。

「健康になる方法は? (中略) 一つ、朝起きること。これは朝早く起きようということである。(中略)

二つ、正直のこと。子供相手の仕事をする人は嘘をついてはいかん。嘘をつく大人を子供は一番軽蔑する。この先生は嘘つきであかんとなると、心のつながりが切れる。(中略)

三つ、はたらくこと。これを聞いたときは、そんなもん当たり前やないかと思うたのでぼくもはたらいてまっせという、かせいでるのところがうかといわれたので、はたらくとかせぐといっしょでしょうがという、いやちがうということで、その違いを話してもらった。

かせぐというのは、金をもうけても、外にはびた一文ださん、とりこむ一方。そしてだんだん金の毒にあてられて、手枷、足枷、首枷をはめられたように苦しんでグウと音をあげる。これがほんまの愚や。それでわかるやろ。枷愚(かせぐ)や。(中略)

はたらくというのは、はたをらくにすることである。はたというのは、そばとかぐるりの人とか、周囲の人とかいう方言である。つまり自分だけでなく、まわりの人たち他人さんに楽しんでもらう、喜んでもらう、助かってもらうということをはたらくという。

人間のしあわせは一人では得られないので、どうしても人々といっしょにつながった形でないと得られない。得られないどころか、一人では生きていけないのである。(中略)

まあ要するに、しょせんは、みんなが手をつながんことには生きていけないということである。

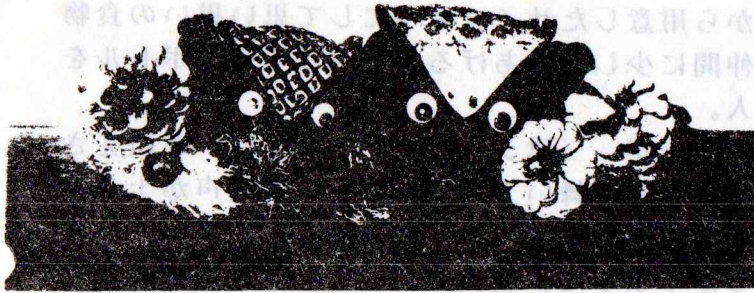
そうなってくると、自分だけよければよいというかせぐは、つながりがないのであかんということになり、はたをらくにする、まわりのひと、隣人、他人をらくにする、喜んでもらう、助かってもらうという、はたらくの方がほんものであるということになる。

そして、世の中で何が一番うれしいか、楽しいかというとき、自分のしたことで人が喜ぶということである。困っている人が助かったという時ほどうれしく楽しいことはない。」

なるほどこのように見れば、榎の木で頑張っている人たちは、健常者と呼ばれている人たちに引けを取らず、まさに、精一杯はたらいているのだなああと再確認することができます。自分一人では解決できないほどの問題を抱えた中であっても、わたしたちに笑顔を向けてくれる人も、食べること、排泄すること、移動すること、生活するすべてに誰かの力を借りなければならない人が、体を持ち上げる際におしりを精一杯もちあげようとする人も、それぞれの形で精一杯はたらこうとしている姿であり、まさにはたらく大人の姿であるでしょう。私は、このことを多くの人たちに伝えていくことがとても大切なことのように感じています。



ふくろうの壁飾りは いかが？



西洋ではギリシャ神話に由来して、ふくろうは目に見えない自然界の様々な潜在的問題を英知と不思議な霊能力で解きほぐし、人間を守ってくれる「幸福を呼ぶ鳥」として人々に信じられています。

親の会では、このふくろうをかわいい壁飾

りにして販売しています。あなたのお部屋にも、ひとついかがですか。

置物として飾って頂いてもすてきですし（写真）、紐付きですので壁に飾って頂いてもOKです。大きさは20センチ前後（横）、値段は800円です。

ひとつ欲しいなと思われる方は、檜の木作業所までご連絡下さい。お待ちしております。（☎0586-61-6055）

【バザー売上報告】

H11.2/ 4.5 松坂屋福祉の店 91,000円

3/14 いずみまつり 9,610円

※各販売先の皆様ありがとうございました。

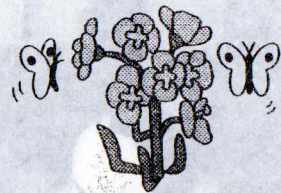
— 譲ってください —

あなたのご家庭で眠っている毛糸はありませんか。収益事業部では、バザー用の材料として使う毛糸を探しています。もし、いらない毛糸がありましたら、譲ってください。

できましたら品質（毛、アクリル……）も一緒に教えて頂けるとありがたいです。

ご連絡お待ちしております。

（☎0586-61-6055）



慰安旅行に行ってきました

檜の木作業所の第3作業室が3月の4日・5日、第4作業室が3月の11日・12日に慰安旅行に行ってきました。今年度の行き先はなんと富士サファリパークと伊豆長岡温泉でした。片道4時間のバスの旅ですが、往きはカラオケの歌いっぱいなし！自分の持ち唄のテープを用意し皆が皆大熱唱。唯一止まった小笠PAでは自分のお給料の中から用意したサイフを手にして思い思いの食物や飲み物を求めました。周りの仲間にしつづつあげる人や買ってきたボトルを眺めながらチビリチビリと飲む人。

富士サファリパークでもそうでしたが、三津シーパラダイスでは、おねえさんがイルカの鼻の先に乗って水中より高く舞い上がったシーンは歓声が上がり、目を見張る表情がいっぱい溢れていました。

ホテルでは温泉にたっぷりとつかりました。朝食はバイキング。当日予想以上の込み具合から、同行の添乗員さんの申し出により檜の木専用の広い部屋をキープして頂いた。入室して、まずメニューの豊富さに感激。なおかつ自分の好きなものばかりをお皿に盛っていいなんて初めての経験。ある人はデザートのパイナップルをそれは沢山乗せていました。満腹。もう動けない。そこへ「出発を少し遅らせましょう」と連絡あり。

また、廊下にあった三段の階段は車椅子の方には不便でしたが、従業員さんが手を貸してくれ、二日目には、従業員さん自ら「私が（車椅子の方を）押しましょう」と申し出られ、三段の階段のところへ来ると「申し訳ありません」としみじみとおっしゃいました。

一年間仕事を一緒にしてきた仲間達が、自分たちが積み立てたお金を使い、日常の家庭や地域から離れた所を旅する楽しみに向けてまた頑張ろう。また、いい顔、笑顔がこぼれる旅行をめざして。



檜の木慰安旅行に乾杯！